

ウェストミンスター宮殿 ウェストミンスター・アビーとセントマーガレット教会

ターナーの描いたウェストミンスター宮殿



イギリス王室の歴史を刻む壮大な建築物群として、その歴史が『すべてがわかる世界遺産大事典<下>巻（2016年度版）』の69ページに紹介されています。特にウェストミンスター宮殿は、通称「国会議事堂」または「ビッグ・ベン」として、真っ先にその姿が思い浮かぶでしょう。ロンドンの市内観光では、テムズ川の対岸からほんの数分で通り過ぎるだけの車窓見学で、ガイドが説明することが多いようです。なんだか、もったいないですね。せめてガイドの案内中に、世界遺産トークも交えれば、より興味深い説明ができるのに、と思います。

さて、このウェストミンスター宮殿は、1834年の大火で大部分が消失して、1860年にゴシック・リバイバル建築様式で再建されたことは、意外と知らない方も多いのではないのでしょうか。

当時の大火の光景を、イギリスを代表する画家、ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー（1775年～1851年）が描いています。50代後半だったターナーは、滞在中のロンドンでこの大事件を目の当たりにし、さぞかし驚いたことでしょう。



国会議事堂の火災
(1835年頃/Tate Britain 蔵)

災害の風景は、報道写真のように描かれることが、しばしばあります。たとえば、1654年にオランダのデルフトで起きた「火薬庫の爆発」では、記録に残すため、複数の画家がその時の状況が分かるように詳細に描いています。

それに対してターナーの作品は、災害現場の緊迫感があまり伝わってこないように感じられます。画面全体がぼんやりとしていて、右手の橋が橋なのか壁なのか、水辺も川なのか池なのか、よく分かりません。遠くにウェストミンスター寺院らしきものが描かれているので、これでようやく、鑑賞者はロンドンだと気づくことができます。

これがターナーの作品の魅力であり、特徴とも云えます。抽象的に描かれていても、象徴的なものがひとつだけあれば、それだけで十分、世界観を表現できるのです。この作品では、ウェストminster寺院らしきものと薄いオレンジ色の炎の流れ、これだけで何が起きているのかが伝わってきます。風にたなびく炎、そして、漆黒の闇に流れる炎。こういった「大気の流れ」に、自分の画風に繋がるインスピレーションを感じたのだと思います。

ターナーの作品には、共通の技法や効果がみられます。

「雨、蒸気、速度、グレート・ウェスタン鉄道（1844年作、ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵）」を取り上げてみると、この絵もぼんやりとしています。よく画面を観察すると、ひとつだけ“これ”だと分かるものがあります。それは「蒸気機関車」です。もしこれがなければ、“ただの橋”にしか見えないかもしれません。しかし、霧の中を蒸気機関車が走っている……、それによって、鑑賞者は“何か”を感じ取ります。空間の寂しさもありません。蒸気機関車が走っていることで、「動き」が生まれます。建物ではその役割は務まりません。機関車は、当然、人が運転しています。つまり、そこに「人の気配」も生まれます。さらに、沸き起こる蒸気が「躍動感」を生み出し、画面全体がとても生き生きとしてくるのです。「蒸気機関車」という斬新な題材を取り込む効果を、ターナーは察していたのでしょう。彼の代表作としてこの作品が後世に残ったことも理解できます。ちなみに、蒸気機関車は、後世のフランスの印象派の画家たちも、よく題材にしました。



雨、蒸気、速度、グレート・ウェスタン鉄道
(1844年/London National Gallery 蔵)

後年から晩年にかけてのターナーの作品には、1点に視線が集中し、そこから周囲へと大気が広がっていく。これは何を描いたのだらうと思わせるターナーの作品には、鑑賞者を効果的に惹きつける魅力があります。ターナーは、雰囲気を出すがとても上手な画家です。そして、これら2作品は、油絵具特有のはっきりとした強い色調はなく、かなり穏やかにぼんやりとしていて、まるで水彩画のようです。イギリスは、大陸側の他のヨーロッパ諸国と違い、乾燥した感じはあまりなく、雨も多く湿潤な気候です。この気候風土も、ターナーの絵に影響を与えていると思います。イギリスの気候風土にはどういった画材が適しているのか、どのように描いたらよいのか、もともと水彩画が得意であったターナーは、水彩画の特徴と気候風土との相性を見抜いていたのです。

余談ですが、海外スケッチツアーに参加された日本人の美術愛好者の方々が描かれた絵では、フランス、イタリア、スペインなどを題材にした作品は油彩画が多く、イギリス、特に湖水地方やスコットランドを題材にした作品は、水彩画が多い傾向があります。

皆さんもロンドンに旅行される際には、ターナー作品を鑑賞しに「テート・ブリテン」に足を運んでみてください。ここには、油彩画から水彩画まで数百点の世界最大級コレクションがあります。その蒼々たる作品群の中でも、私が気になっている作品として、ヴェネツィア派の画家、カナレット（1697年～1775年）へのオマージュと思わせるような絵画があります。それは、「ヴェネツィアを描くカナレット」という1833年の作品です。カナレットほど緻密な描写ではないかわりに、ぼんやりとしたターナーらしい作風になっています。カナレットについては、前回の「マイスターのささやき」で、第12回「ヴェネツィアとその潟」の中でご紹介していますので、そちらをご一読ください。

ターナーは、イタリア、特にヴェネツィアに何度も旅行していて、ヴェネツィアを描いた作品も数多く遺しています。ターナーは精緻な絵も描ける画家で、20代頃の作品には細密な水彩画も多数あります。これには少なからず、カナレットの影響を受けていたと考えてもよいでしょう。カナレットはターナーより約100年前に活躍した画家で、イギリスで人気を博していました。ただ、ターナーはカナレットの没年に誕生していますので、ふたりの人生はかけ違っています。ターナーは、作品名に「カナレット」の名前を入れるくらいなので、尊敬の念を抱いていたでしょうし、ちょっとしたライバル意識もあったのかもしれませんがね。



ヴェネツィアを描くカナレット（1833年/Tate Britain 蔵）

ところで、ターナー以前のイギリス人画家というと、ウィリアム・ホガース、ジョシュア・レノルズ、トーマス・ゲインズバラなどが挙げられますが、それもイギリス国内で知名度が高かったくらいで、世界的にはまだまだそうでもありませんでした。イギリス絵画が西洋美術史の表舞台に登場するのは、意外と遅く、18世紀になってから。当時のヨーロッパ大陸では宮廷文化が栄え、ロココ美術が隆盛を極めていた時代です。そのような時代に、ターナーは、若くしてロンドン・ロイヤル・アカデミーの会員となり、晩年は副会長にまで上り詰めました。会員としての地位を確立し、画家としても独自の画風を極め、徐々にヨーロッパ大陸からの注目も浴び始めました。ターナーの絵を見初めた当時のフランスやイタリアの画家たちは、イギリスにもこのような斬新な作風をもつ画家がいるのか、と衝撃的だったことでしょう。イギリス絵画が西洋美術史の表舞台に登場した瞬間です。つまり、イギリス絵画を世界に誇れる絵画に押し上げた人物こそ、ターナーであり、今もなお、イギリスの国民的な画家であり続ける所以なのです。そして、彼の遺した作品によって、当時の世界遺産の、美しくも幻想的な姿を偲ぶことができるのです。

沼田政弘